
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 彼は《かれこれ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 自己|嫌悪《けんを》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「言+墟のつくり」、第4水準2-88-74]

[# ここから4字下げ]
誰でもわたしのやうだらうか？ ジュウル・ルナル
[# ここで字下げ終わり]

僕は屈辱を受けた時、なぜか急には不快にはならぬ。が、彼は《かれこれ》一時間ほどすると、だんだん不快になるのを常としてゐる。

×
僕はロダンのウゴリノ伯を見た時、或はウゴリノ伯の写真を見た時、忽ち男色《だんしよく》を思ひ出した。

×
僕は樹木《じゆもく》を眺める時、何か我々人間のやうに前後《まへうし》ろのあるやうに思はれてならぬ。

×
僕は時々暴君になつて大勢《おほぜい》の男女《なんによ》を獅子《しし》や虎に食はせて見たいと思ふことがある。が、膿盆《のうぼん》の中に落ちた血だらけのガアゼを見ただけでも、肉体的に忽ち不快になつてしまふ。

×
僕は度たび他人のことを死ねば善《よ》いと思つたことがある。その又死ねば善いと思つた中には僕の肉親さへゐないことはない。

×
僕はどう云ふ良心も、芸術的良心さへ持つてゐない。が、神経は持ち合せてゐる。

×
僕は滅多《めつた》に憎んだことはない。その代りには時々輕蔑してゐる。

×
僕自身の経験によれば、最も甚しい自己|嫌悪《けんを》の特色はあらゆるものに [# 「言+墟のつくり」、第4水準2-88-74] 《うそ》を見つけることである。しかもその又発見に少しも満足を感じないことである。

×
僕はいろいろの人の言葉にいつか耳を傾けてゐる。たとへば肴屋《さかなや》の小僧などの「こんちはア」と云ふ言葉に。あの言葉は母音《ぼいん》に終つてゐない、ちよつと羅馬字《ロオマジ》に書いて見れば、Konchi aas と云ふのである。なぜ又あの言葉は必要もないSを最後に伴《ともな》ふのかしら。

×
僕はいつも僕一人ではない。息子《むすこ》、亭主、牡《をす》、人生觀上の現實主義者、氣質上のロマン主義者、哲学上の懷疑主義者|等《とう》、等、等、それは格別|差支《さしつか》へない。しかしその何人かの僕自身がいつも喧嘩するのに苦しんでゐる。

×
僕は未知《みち》の女から手紙が何か貰つた時、まづ考へずにゐられぬことはその女の美人がどうかである。

×
あらゆる言葉は錢のやうに必ず両面を具へてゐる。僕は彼を「見えばう」と呼んだ。しかし彼はこの点では僕と大差のある訣《わけ》ではない。が、僕自身に従へば、僕は唯「自尊心の強い」だけである。

×

僕は医者に容態を聞かれた時、まだ一度も正確に僕自身の容態を話せたことはない。従つて [# 「言 + 嘘の
つくり」、第4水準2-88-74] 《うそ》をついたやうな氣ばかりしてゐる。

×

僕は僕の住居《すみひ》を離れるのに従ひ、何か僕の人格も曖昧《あいまい》になるのを感じてゐる。この現象が現れるのは僕の住居を離れること、三十 | 哩《マイル》前後に始まるらしい。

×

僕の精神的な生活は滅多《めつた》にちやんと歩いた [# 「歩いた」に傍点] ことはない。いつも蚤のやうに跳ねる [# 「跳ねる」に傍点] だけである。

×

僕は見知り越しの人と会ふと、必ずこちらからお時宜《じぎ》をしてしまふ。従つて向うの氣づかずにゐる時には「損をした」と思ふこともないではない。 [# 地から 1 字上げ] (大正一五・一二・四)

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社

1965 (昭和40) 年12月20日発行

底本の「羅馬字《ロオてじ》」は、「羅馬字《ロオマジ》」にあらためました。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月27日公開

2003年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。